

シリーズ

「ある監督官の問はず語り」(第 3 回)

—デカルト・労災・過重労働—

まったく別物と思われていたものが、実は同じものの両側面であった、という発見が、数学の世界ではしばしば起こる。

数学、というとにかく頭が痛くなる向きも多いかもしれないが、しばしお付き合いいただきたい。数学には、大きく分けると二つのジャンルがある。

ひとつは代数学だ。未知数を x という代数で表し、数式変換によって解を求めていく、いわゆる方程式である。高次方程式となると、平方完成などのテクニックが必要になるため、ここで挫折してしまうことが多い。

もうひとつは幾何学だ。図を中心に解いていくので、こちらのほうが取っつきやすく思われるが、数学独自の文法である『証明』を用いて解くことが要求されるため、やはり訳がわからなくなり投げ捨ててしまいがちである。

これら二つの数学は、それぞれが独立して発展した歴史を持つ。

まず代数学の起源は、アラビア世界にあると言われている。9 世紀にバグダードの数学者であるアル＝フワーリズミが著した『イルム・アル・ジャブル・ワル・ムカバラ (約分と消約の学)』は、十字軍の焚書を免れ、その後ヨーロッパ世界に伝わった。代数学は英語で algebra というが、これは先述の書名に由来する。

一方、幾何学の起源は、古代ギリシャまで遡る。かの有名なユークリッドが紀元前 3 世紀に纏めた『原論』は、19 世紀まで幾何学の聖典のごとくに扱われた稀有な書物である (二千年以上も最先端であり続けた書物は、これと旧約聖書以外にはない)。

長く別物であったこの二つの学問は、やがて、ルネサンスの火が灯ったヨーロッパにおいて咀嚼された後、あるひとりの人物によって統合されることとなった——ルネ・デカルトである。

「我思うゆえに我あり」——合理主義哲学で知られるデカルトは、実は一流の数学者でもあった。特に、二つの数の組 (x, y) を平面上の一点として表すデカルト平面は、数学に大きな刺激を与えた。というのもこのアイデアは、代数である x と y を平面という幾何とリンクさせるものだったからだ。このときから、代数学と幾何学はひとつの数学となり、さらなる発展を遂げていったのである。

長々と数学の話ばかりで恐縮だが、何が言いた

いのかというと、つまり、冒頭述べたような「まったく別物と思われていたものが、実は同じものの両側面であった」という『気づき』が大事なのだ、ということである。

ところで、近年の労働を巡る問題も、大きく二つがある。

ひとつは労働災害、そしてもうひとつは過重労働の問題だ。前者は、長期的な減少傾向がストップし、下げ止まりの局面に入っている。後者も、働き方改革の名のもと政府一丸となって旗を振っているが、なかなか現場では抑制されないのが実情だ。

このような閉塞した状況を打開する対策として、前者には『リスクアセスメント』が考案された。これは、現場にあるリスクを調査し、その重篤度に応じて手当をしていこうという、災害の未然防止を念頭に置いた手法である。また後者にも『労働時間把握適正化ガイドライン』の制定がなされた。まさしく、労働時間を適正に把握することにより、サービス残業の抑制と労働実態の正しい認識を促そうという取組だ。これらの対策を講ずることで、それぞれの分野でそれぞれの抑制を図ろうとしているのである。

だがここで是非、考えていただきたい。『リスクアセスメント』と『ガイドライン』で示された対策は、実は、本質においてまったく同じなのではないだろうか。

その本質とは、すなわち「まず実態を正しく把握する」ことである。

リスクを正しく把握し、労働災害を防止する。労働時間を正しく把握し、過重労働を防止する。入口と出口は違うが、どちらも「正しく把握する」ことを起点とすることにおいて、まったく共通しているのだ。

両分野の実績がやや頭打ちと言われる現状、「まず正しい現状把握が重要だ」という認識に立ち返ることは、さらなる進展を遂げるために極めて重要なことだと思われる。そして、こうした思想を働き方改革の波に乗じて企業トップ自ら示し、職場の雰囲気を一変していくことこそが、労働環境が今後、劇的に改善するための『気づき』となり得るのではないだろうか。

今年は、神戸港開港 150 周年とともに、全国産業安全衛生大会も神戸市で開かれる、まさに節目の年だ。この機会に、是非ともよい『気づき』をひとつ、職場に与えていただきたい。